

遠
2208
14



13
2208
14

星月夜顯晦録三篇卷之四

目錄

○次郎朝時兄の練より自ら罪を繕ふ

式部丞泰時隱密に舎弟初時を乳明の圖

局松嶋御所へ歸る

○實朝卿局松島を以初比奈義秀より賜ふと斗ふ

泰時又義時と争練圖

局松島尼公より伝来よりて秋傷の号

○尼公嫉妬局が縁結を妨げ却て胡時小婦をめんとい

局松島尼公の若くは貞女の道を通る号

星月夜頭晦録三篇卷之四

次郎朝時兄の諫を随て自罪を祈ふ

其事不彼を知り己を知ると死へ百とび戦て百とび勝とい。彼との敵あり己との味方なり専ら軍勢の弱るれも常乃事もまたけ意をゆつと安んじ。義時唯和田の悪むべき状をとておのまは非あり伏兵へどとて百とび争て百とび私腹をゆる所習あり。北條泰時おりの子細あり。義秀が仇めと延び申むる伏兵義時この序は和田が威を折んと欲まは是非朝比奈を罪に墮さんとれりども君も廣元も泰時が言を然りとて。猶豫の沙汰よおびたれば力あり先駆り。泰時が所存を才胡時夜希沙奥の守護を乞受あがら。御所をば所方にゆて夜陰退出



甘頼もれども、故へのゆゑ、今朝もや、顔色をまわす。かゞど、これども、全くと病氣も、とどまれば、不安なま、一昨夜、扇が逐電、今日の経義、義秀が、不を考ふる、善く好色なれば、りや、壮士、今朝、あつて、疑、先、一色を、尋ね、向んと、これ、を、と、よ、つて、春時へ、急だ、立、つ、才と、用、所、に、拒、れ、汝が、顔色、常、な、ら、ば、お、後、不、深、く、労、さ、る、と、何、も、と、れ、が、り、子、細、あ、ら、ば、色、ど、か、べ、何、事、ち、り、と、も、よ、ろ、く、手、ひ、ぬ、さ、る、べ、我、平、を、教、訓、を、加、入、し、た、も、汝、を、用、ひ、さ、る、也、け、と、び、扇、逐、電、お、け、さ、り、且、甚、だ、疑、人、知、ら、る、兄、弟、の、あ、い、ご、ま、隠、さん、や、う、あ、け、し、と、汝、を、乳、と、既、も、今、日、如、此、と、く、乳、向、の、乳、亦、朝、比、素、が、お、ん、答、の、返、は、ぶ、さ、の、語、を、せ、け、し、と、赤、面、一、言、く、云、葉、も、お、ざ、り、し、が、俄、に、座、を、と、も、駈、か、さん、と、は、春、時、驚、き、引、止、れ、何、事、か、と、

何方へのぞや。所存わぶま、速ま、べ、相、違、の、筋、も、あ、ら、べ、と、宥、免、嫌、り、は、又、朝、時、那、座、ま、つ、さ、候、を、浮、見、今、文、や、も、面、白、く、し、お、今、日、の、お、ん、明、義、秀、お、ん、答、の、根、子、成、つ、て、安、困、を、て、居、れ、ば、速、ま、名、を、い、て、朝、比、素、を、救、ご、ん、ば、あ、ら、べ、と、所、へ、あ、ん、と、存、ぞ、私、あ、ら、う、次、弟、や、上、人、と、く、扇、は、お、か、け、誘、出、せ、し、編、ま、り、朝、比、素、は、助、け、れ、奉、成、を、務、め、扇、を、送、り、ぬ、さん、と、ご、ん、ご、れ、と、も、奉、事、は、ぬ、さ、る、子、終、ま、く、お、あ、ら、ば、面、白、く、さ、ら、し、義、秀、任、義、の、白、状、を、取、り、斤、時、も、座、を、お、ま、く、ゆ、と、白、状、は、テ、以、ま、ぞ、春、時、も、つ、と、吐、息、を、し、き、と、君、や、と、い、ひ、尋、ね、よ、果、て、推、量、の、通、り、あ、れ、ば、又、高、懸、せ、し、今、文、何、て、血、を、た、と、ま、し、も、名、余、を、て、義、秀、が、罪、を、救、ん、と、一、条、神、妙、あり、と、感、ず、内、か、み、海、と、る、が、子、終、は、ら、う、様、も、あ、れ、べ、さ、ら、義、秀、の、子、亦、も、あ、り、身、一、依、結、見、負、の、内、法、と、あ、る、也、は、斗、ひ、が、ど、

式部丞

養時

隱密に舎牙

初時と

乳明

の事



とも汝先非を悔むの事あるが、朝比奈へ恩返す。自ら存の事
 出よ左あきて六憲法をたがへ。汝もやう思ふ事をあはれ族とあつべし。
 明日和田左衛門尉侍所はせられしとたけ人又就て名を出よせよと
 却てよ病しく交断せしむ。且も盛が持憤を散せしむる道理と利害を
 説て中合はれは、朝比奈承知しその夜へ休息し。翌日和田が仕を
 伺ひ頼て朝比奈侍所に至りしは、朝比奈盛一人ありし也へ、独着尾と
 ちひ。和田は向てせしむる局、和田が正しとて、秀秀及由不審とせしめ
 ぐん。坊ふみびど。白地は中よとて、別務ひせしむる某を、義車のおま
 ろ。煩悩は抱され。幸とせ達せんが為。右の始末はかまひ。如、初ま乃
 者よ見外され。あもも秀秀及の組、雨更ハ既ハ擧とらうしと、汝を
 尋りて遣れぬ。先非を悔ふ不至と。煩悩の雲方も晴ゆを早速

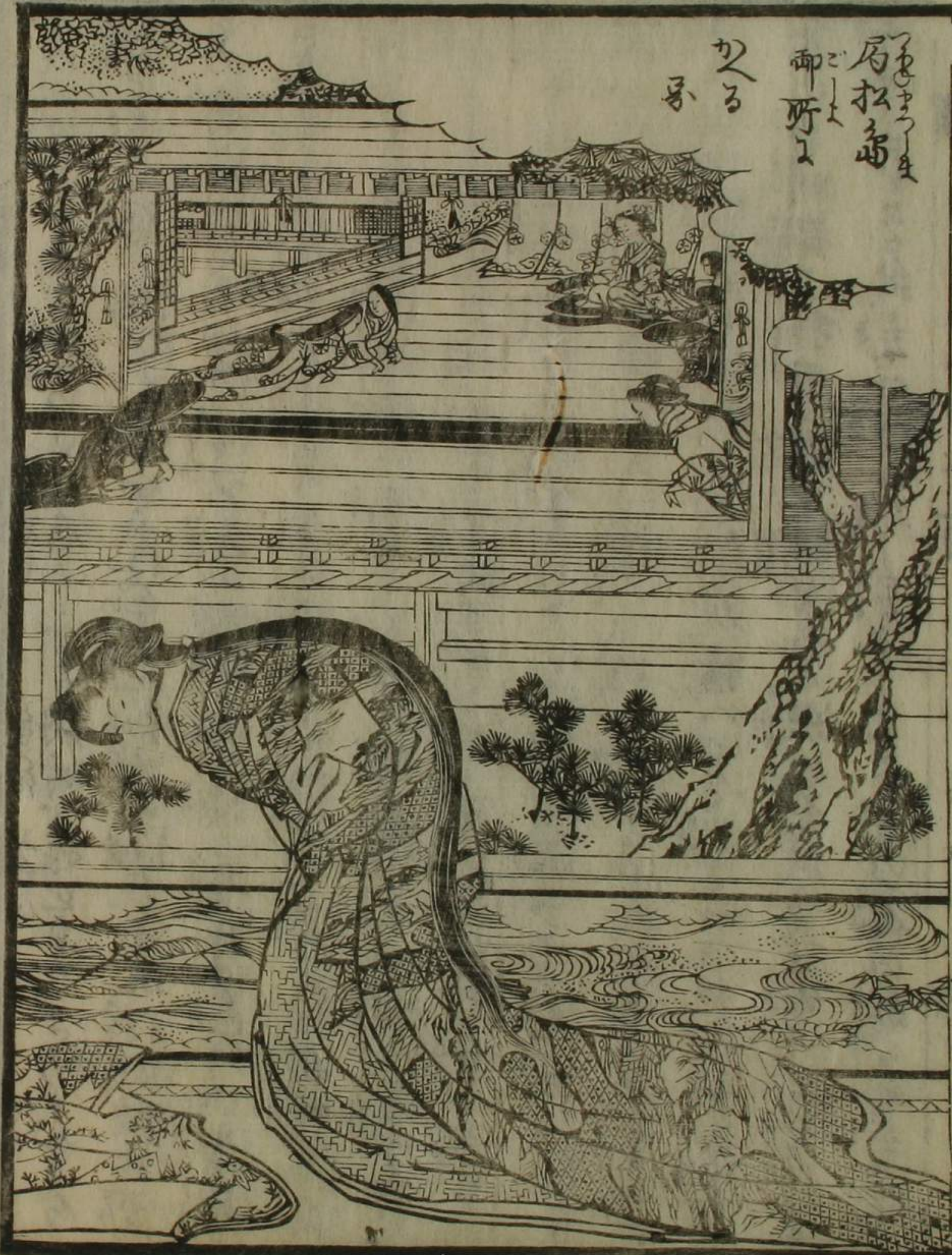
局と送りぬきべきのぬ。その内夜明人目とせし。猶藤の同よ。たや
 和孔明の事をあり。名を出せしむると委細は物語局に於て
 びせせざる。然り、辨は秀出せしむ。罪科、狎こまら。亦私宅へ侍
 とハヤせども、秀秀及の義は犯す。その候、さし並は、石より
 而斗ひ下る。某名を出せしむ。秀秀及は罪あり。早く
 変りてを頼む。なまるとやけは、義盛、自ら名を出せしむ。上ハ
 別義ある。油トをあら。け事、高聞は達ての、詮義あれば、某一人の
 斗ひあも成が。珠は、辨は秀秀及も有る。自由の、変り、彈あり。
 和比奈の父相州、珠は、辨は秀秀及も有る。自由の、変り、彈あり。
 と、女へ、珠と。只君の思ふは、任せしむ。和比奈の、為、足か。先、後、を、終
 おん、は、達、と、さ、あ、り、と、く、朝、時、を、侍、所、は、苗、を、て、度、え、と、辨、は、有

筋は終つてけむの依始より。内々の沙汰とて吟味申す。事
 不取斗い方あるべき。其時領り是を礼。愚息養秀が所為
 ありとて。其は吟味せよと申す。余我をも俱に罪せんと結搦之
 おのれが罪道より救入の不義を重くせんとし。まごの昭白あるが
 事。形のごく大違は云々。昨日の詮養も我子のより秀を
 疑は拷問させんと。ユミありと知る由いと。易と事あるが
 子とていども。養理あるのよ。世の人ある。然るれば自ら拷問の
 事。條々に奉まらざれば。君のおん斗いと。故ひあり。あつた
 今朝朝時が名字出さるるのまれば。つと是を礼明。局を御所へ
 送りぬさせ。養時が面前にて不義の罪を加ん。いと易いと。いども
 彼ホがどく。嫉妬のわひを存せぬ。養盛未練の振舞いと。いども

所存も改あり。その上其これを礼め。北条家の恥辱少から。次
 去りつ。又例の嫉妬を生じ。つと嫉恨と。養之の工夫と。あつた
 必定あり。其是を養と。あつた。若者君。其把を。かゝる
 國家の憂を。引出せり。のこ。一君のおん。あるが。養との養と
 あり。御。崇おが。怨恨ある。振ふ。その。う。つ。達せられ。君の
 旧交。引を。伺ひ。あつた。一。殊は。朝時。又と。替り。若輩。わが。から
 養を。毎へ。養秀。が。罪を。赦ん。と。名。出さる。志。健氣の。養
 罪せられん。と。不便の。い。つ。一旦。ひ。込。る。意。養。よ。う。り。と。
 奪ひ。物。を。行の。底。養秀。不。助。られ。と。於。信。養。よ。ひ。て。於。獨。を
 難。し。自。ら。折。出。に。付。て。由。彼。は。内。録。厚。けれ。ば。或。と。尼。呂。り
 付。て。名。出。身。負。を。養。と。ん。と。ま。さ。不。傳。所。よ。あ。り。それ。が。一。せ

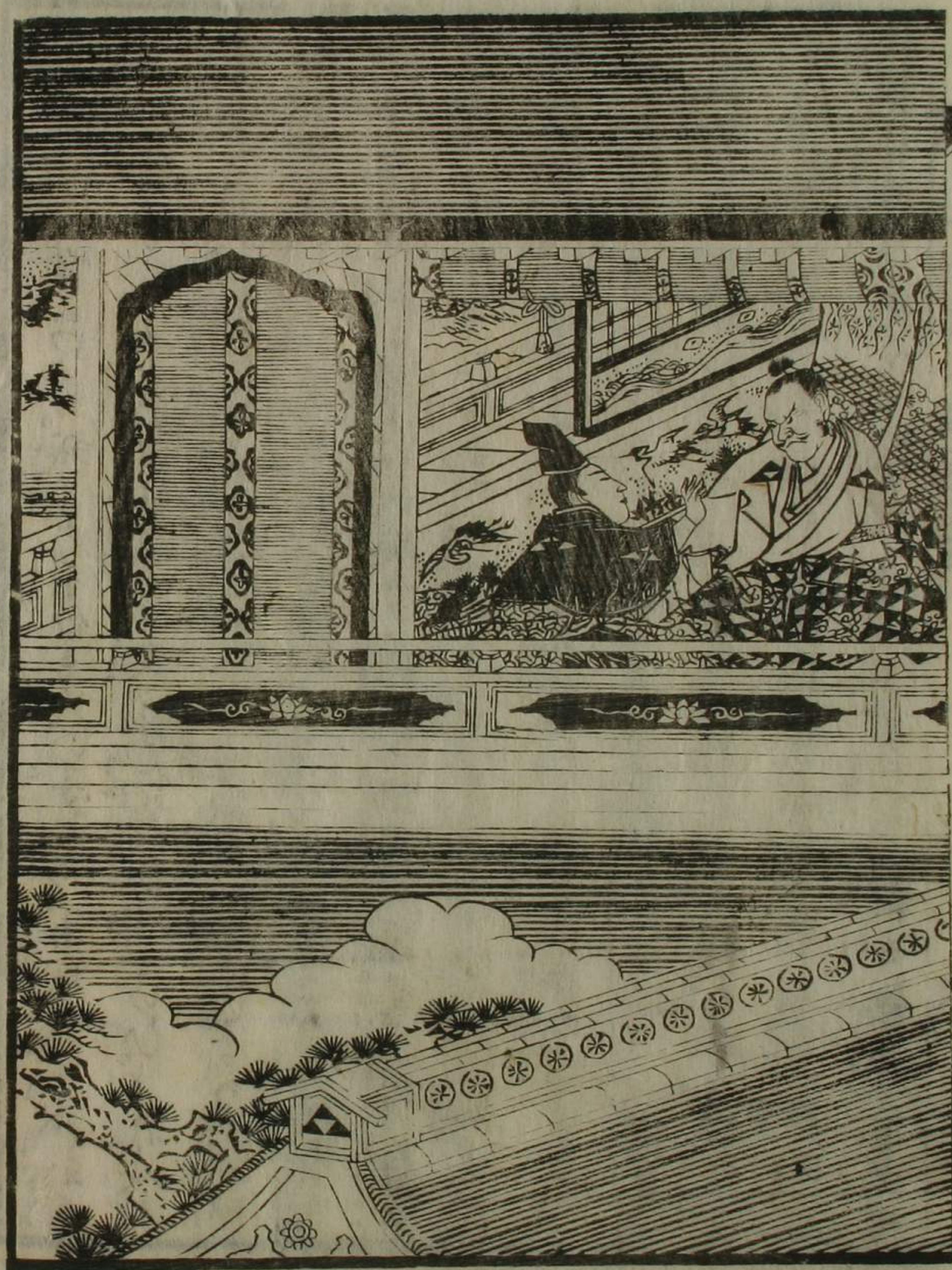
め 月がけ祈せり。等閑の及ぶ所よあはれ。多岐りつて寃も亦
 投ざる。攝摩子准ど心定見泰時。沢と知りあつて。勃め紙さりの
 ろん。何れもせよ。先非を悔ての祈。且も賢秀をそのとて。あて
 助けぬせ。そのひ空一かごさう程。胡時が命を助け奉へし。そ
 是ホとおん會あそ。け執違あつて。定て。此をのちん斗ひあんとや
 け。は。廣え。ゆと。受て。且驚。然。且感。相。及。の。子。息。が。あ。ん。と。ハ
 斗。さ。う。れ。胡。時。が。重。祈。神。妙。あり。その。元。又。君。の。おん。為。静。澄。の。と。を
 意。と。せ。と。る。う。成。衣。良。誰。う。あ。ふ。あ。ん。お。方。は。由。定。と。後。悔。の。お。出
 中。べ。だ。れ。の。誠。も。君。の。大。幸。あり。と。按。投。あ。つ。と。君。辺。へ。疾。せ。れ。義。登。六
 侍。取。よ。ぬ。く。廣。え。へ。控。ど。た。ま。は。し。由。法。を。行。ふ。と。と。て。胡。時。を。指
 一。む。叔。中。廣。え。の。胡。時。が。祈。せ。る。は。身。を。盡。さ。ぶ。底。ま。で。な。ら。し。め。上。れ

乃れハ君子も大ニ驚きたる。存りし。胡時が振返あり。さあ。と。の。中。に
 局。と。穿。く。ぬ。入。と。令。せ。れ。廣。え。和。田。は。違。さ。る。友。に。胡。時。へ。言
 その。筋。の。役。目。へ。た。し。違。を。幸。一。局。松。島。と。ぬ。入。あ。け。は。し。由。法。祈
 中。の。版。せ。あ。ひ。指。子。おん。尋。あ。り。る。に。局。は。利。發。の。女。あ。れ。ハ。胡。時。に。え
 務。ま。さ。と。り。も。狎。狼。藉。の。儀。あり。先。非。を。悔。え。控。ま。し。大。切。に。守。り。出
 並。つ。り。や。り。る。也。涉。意。も。今。文。不。便。也。や。臣。武。お。の。おん。辨。へ。し。し。一
 仰。上。れ。胡。時。が。罪。を。申。着。き。され。下。され。也。と。申。執。成。あり。尼。公。あ。の。け。と。を
 言。ひ。し。由。法。祈。の。胡。時。あ。れ。ハ。控。く。申。扱。の。儀。あり。これ。よ。う。つ。て。君。賢。時。を
 ぞ。れ。胡。時。犯。さ。ぬ。の。罪。か。く。の。ご。執。権。は。い。つ。も。斗。つ。つ。や。と。おん。尋。あ。わ。る。
 一。直。に。賢。時。領。よ。和。田。不。罪。を。探。せ。んと。胡。比。奈。紙。咄。び。也。又。義。登。は。よ
 吟。味。を。せ。ら。る。紙。奈。の。毒。よ。や。臣。れ。し。も。その。夜。の。筋。も。又。義。秀



局松島
御所
か
る
系

長月三編



星房村三神卷四

命せらるるも同公まほしに再ひ言てあれ。是か事らるるも
 賤く用ひざれば。恭時愁傷されども甲斐なる。その傳は止まらり。
 左邊の尉義盛はては伝少。義時嫉妬の増長。忍成も義を
 毎へまを令と用ひざる不た不義の奸臣なりと内々憤り居り。又こ
 怨を銜てこそありり。彼局松山と先達と和田新兵衛尉胡盛
 君へ預ひ胡比奈が妻よ中めりんと事とにいふ。左にこれの内
 胡時誘ひ出せし。皆くは沙汰もあらず。君熟く思ひらるる胡盛が
 影ひらる。義秀局は意慕の心ありての事あり。あつた胡時が誘ひ
 出さの時。義秀を捕へり。嫉妬の心を生じ直し許さず。左に
 るして胡時を放ぬ。義秀が心底感ずても余りあり。意慕より
 牙とあらう。思ふ人の人あり。誠は義秀が実名の字洲のどく。

義子秀一者之と感ずる。兄胡盛が影ひは任せ秀と留せ
 一め及や。局は意慕の心あり。あつた胡時が誘ひ出さの
 騷動のえと。局は意慕より發る。胡時又又限らる。壯士等
 一男よといひて。前後の存あり。胡時どは狼藉と達んと。不使乃
 次あり。定まる夫ある時。其憂もある。かゝる。うて松山を家臣の
 中へ嫁せ。めんと。先を。和田新兵衛尉胡盛。彼女を合言。秀
 義秀も揚り。度と影ひらる。自由の斗ひる。かゝる由。普くおは
 べと中。直知。義盛もは。びの騷動。及ぶ。去あ。義秀
 斗ひ。伝義を。胡時。助。神女。斗ひ。る。バ。義盛と。名ひ。兄
 胡盛が影ひは任せんと。欲を。渠ハ三浦の棟梁。義盛が三男あり。と
 實ハ保家。一後の。影ひ。乃が。夫。配。する。も。秘。笈。月。は。あ。ら。む。と。

ころとも言ふべし。されども和合せざる緑色の半つて陰を。局が志を
 けりあつたの事か。けしきでも先所屋の市所存り。あつたやと宮の
 くははる所は。夢をみて実りと。さういふ。秀と。た器量ある勇士乃妻
 と。んハ局も奉々。と。自らは。外は存。由。早。速。局。も
 中。笑。せ。志。底。を。も。回。明。め。ゆ。り。と。は。言。あ。り。そ。後。局。へ。天。の。さ。う。言。仰。せ
 されり。所。存。あ。つ。た。色。を。中。へ。と。室。ひ。た。れ。ば。松。島。公。の。門。前。立。ど。り。候。び
 ろ。ぐ。ら。志。と。中。に。出。候。中。上。り。の。拙。は。身。分。を。り。て。君。の。出。身。ひ。り。下。さ。ん
 事。否。も。ど。き。や。う。中。を。あ。く。は。幾。重。も。か。と。ま。り。な。さ。う。と。も。姓。丸。又
 出。候。中。け。り。あ。つ。た。は。中。屋。中。も。は。候。び。あ。り。け。り。武。お。の。中。方。へ。告。を。せ。あ。い
 く。が。若。穿。台。局。の。緑。辺。厄。公。よ。告。を。な。さ。う。ぞ。ん。ば。如。何。あ。つ。た。と。の。市。賢。也
 ち。い。中。核。爆。と。早。い。せ。れ。仰。上。ら。う。と。き。積。あ。て。誓。く。沙。汰。も。あ。た。知。又。内。く

局の方より初盛又初と告は。かひの通り。中舎舟は。松島及を下さ
 う。内。後。交。せ。り。と。知。せ。る。也。初。盛。候。び。初。比。奈。も。中。中。候。上。ハ。又。イ
 告。を。な。し。と。先。長。兄。新。左。衛。門。尉。を。盛。又。相。控。せ。り。兄。才。父。の。初。は。出。こ。の
 事。の。始。終。を。中。君。の。出。身。ひ。を。物。語。け。し。ば。後。盛。も。否。む。と。ま。あ。つ。た。子。息
 等。が。初。ひ。び。び。と。その。出。身。ひ。は。初。り。の。あ。つ。た。後。秀。が。面。目。を。下。さ。り。下。
 武。將。賢。君。よ。在。せ。ば。その。後。中。あ。つ。た。後。尼。公。の。市。所。存。り。な。さ。う。と。う。づ。く
 中。左。右。候。待。べ。し。と。中。り。の。後。中。は。け。り。中。時。傳。へ。例。の。偏。執。を。記。し。息
 初。時。は。場。を。下。さ。り。女。を。ら。に。後。秀。又。下。さ。り。と。あ。つ。た。殊。念。を。極。見。は。負。の。出。身。ひ。と
 憤。り。極。て。尼。公。の。市。所。存。り。に。候。報。を。中。上。か。の。局。を。後。秀。へ。下。さ。り。は
 乙。氏。子。一。仕。士。等。恨。み。合。え。禍。災。引。出。さ。ん。ハ。必。定。ま。り。殊。さ。う。一。と。ん
 初。時。誘。ひ。出。せ。り。と。局。中。の。罪。も。た。あ。つ。た。尤。初。時。出。免。を。受。り

といども。素乃依守りて。美級仕進拂ひぬ。その初時が懸合の局と
 義秀は揚りて。我一族の恥辱をゆるぐ。り。由仁公の由斗ひる
 下されん。初時執心の女ある。依免の上。局をあらん。とて存せ
 と。自分勝ゆ依中り。尼公元来嫉妬。淫事。を双の生得たれど。
 美時が去。依吹ひ。依縁き。よおて。見。苗。べき。と。宣ひ。美時を
 取され。即時。武。お。の。由。方。へ。由。使。を。取。て。局。松。を。り。歸。来。ま。と。の。下。も。
 一旦。初時。が。為。は。誘。ひ。せ。れ。と。ま。れ。ん。今。迄。の。ど。く。奥。子。百。仕。へ。れ。ん。
 遠。き。る。な。は。似。る。べ。し。初。時。由。免。あり。し。う。も。又。美。級。終。り。て。退。出。せ。り。
 志。つ。く。局。を。も。暫。く。我。方。へ。幸。い。と。し。何。事。も。仰。送。れ。ん。ん。
 秀。も。お。け。け。方。の。沙。汰。依。由。受。有。て。の。工。事。と。頗。由。迷。惑。み。つ。れ
 一。が。の。づ。ま。由。受。は。達。せ。極。る。ぬ。と。ころ。局。先。進。て。より。初。時。が。怒。ひ

且。は。け。び。義。秀。が。振。旦。神。妙。ある。が。由。局。と。与。へ。妻。と。な。り。先。
 再び。仕。士。等。が。懸。念。を。う。り。ん。振。あ。と。ぞ。ん。ど。その。旨。中。後。一。並。也。も。
 母。公。へ。由。中。上。ゆ。て。表。向。す。付。ぐ。存。あ。れ。と。始。終。づ。り。く。由。合。あり
 なる。尼。公。再。び。由。使。を。取。て。局。が。縁。辺。と。い。存。由。う。ぬ。と。あ。て。初。時。が
 擲。合。の。女。を。自由。に。嫁。せ。め。ゆ。り。と。お。せ。る。べ。し。その。上。教。多。の。仕。士。を。以
 かけて。や。め。ゆ。り。ん。と。依。中。り。つ。く。又。も。那。公。筆。あり。け。り。義。秀。は。揚。り。て。の。
 仕。士。亦。恨。を。い。ひ。死。發。亂。を。生。ぜん。由。斗。り。が。り。是。る。て。靜。體。の。由。斗。ひ。よ
 あり。ば。い。方。へ。幸。い。と。し。振。中。世。も。その。發。勃。る。も。ん。為。局。と。り。が。播。え。ん。し
 給。仕。せ。り。め。何。れ。の。由。沙。汰。依。止。め。月。日。依。経。る。上。あ。て。の。い。つ。由。も。あ。り。成
 べ。今。ける。依。斗。ひ。ゆ。り。の。亂。を。求。る。及。び。ゆ。り。ん。變。り。て。由。を。判。し。る。べ。し。且
 局。の。由。斗。ひ。方。へ。幸。い。と。し。と。嚴。し。く。仰。送。ま。す。と。い。ふ。大。に。款。息。あり。く。

皇代三編卷之四

十一

透すものもあつくとしども。陽光同穴の結びを結びよ。君
 夫婦の厚情よふんぞ。既に結び申せんとせるところある
 一旦は空しく。外の作所はけされ。尼公のおん例を離しめられぬ。
 偏に押し同糸の身の上。君も小嫌な作所と時めけども。
 吳山の住居よとまめだ。想ふ人の使さく。嘆きのあつぬ。涙す
 やと。朝夕浮世悲し。人よんま下。涙せと涙を蓋むところの
 辛苦。一方ありぬ。悲しあり。尼公の居を嘆よせ。指よと伺ひ
 んのよ。終日終夜愁傷の侍あり。尼公こそは。死んぬ。
 例近く。石道。その方の為とわひひ。け。知。指。並の如よ。あやあへ
 悲泣の侍あり。朝夕汝を慕ふて。一旦誘ひ出せし由。おひ。侍。あ
 り。あつ。されども。ちと。我。を。毎へ。各。業。ゆ。へ。復。し。死。志。あ。つ。た。

兼て無台の縁もあつた。不結んとあつ中。その方は。息慕の心
 け。な。の。の。ふ。か。う。疾。う。我。は。お。せ。の。不。表。向。あ。て。近。と。せ。ん
 の。紙。事。よ。を。あ。つ。く。を。侍。の。お。の。公。あ。つ。く。去。あ。つ。く。つ。た
 者の。紗。子。を。あ。つ。く。を。底。の。不。使。ま。れ。近。と。う。ち。朝。時。と。嘆。ひ
 返。し。の。方。と。夫。婦。よ。る。は。く。を。彼。の。自。の。甥。あ。て。小。糸。宗。家の
 次。男。あ。れ。ば。の。方。が。考。え。奉。の。夫。あ。つ。く。必。要。あ。つ。く。と。あ。つ。れ。と
 宣。ひ。け。且。ば。松。も。由。岐。な。毎。よ。身。と。費。し。忍。び。涙。を。飲。ん。で。對。ん。と
 さら。は。洞。あ。つ。く。と。悲。し。の。辨。あ。つ。く。也。尼。公。か。さ。つ。く。の。お。を。思。ひ。あ
 ち。ご。辱。の。水。部。を。あ。げ。辱。あ。つ。く。ぬ。身。と。有。が。た。店。半。ひ。紙。よ。か。ま。る。こ
 ころ。幸。ひ。嬉。し。い。存。在。也。も。君。は。夫。婦。の。下。知。あ。て。定。め。の。し。し
 我。身。の。今。今。又。尼。公。の。仰。し。隨。ひ。ゆ。ん。も。栄。花。は。靡。し。く。後。指。の



三十一

二十

先約と背^{せんやく}に^{そむ}た^{のち}後^{あひせいの}は^あ仰^{あや}ぎ^せれ^り 如^{ごと}け^んの^まま^いる^さ 不^ふ義^ぎ者^{もの}ありと
 嘲^{あざわ}られ^るる^が 怨^{うら}ま^いる^が 尼^{あま}公^{こう}の^み市^{いち}名^なを^ぞ 汚^{けが}れ^を 辱^はら^しめ^りゆ^りば^やと
 辱^はら^しめ^り 知^ちる^が 市^{いち}名^なを^ぞ 尼^{あま}公^{こう}の^み市^{いち}名^なを^ぞ 汚^{けが}れ^を 辱^はら^しめ^りゆ^りば^やと
 怒^いり^のめ^のと^りども^も 狂^{きやう}に^まつ^た 道^{みち}を^けり^ます^べ 白^ね眼^めと^して^は 辱^はら^しめ^りゆ^りば^やと
 立^たて^て 笑^{わら}ひ^の 回^まり^入る^よ

皇月夜顯晦録三篇卷之四終

